

# 希望の星　おおいなる夢

小田 純之介

もうじき、シャトルが立つ。私は恋の外の景色を眺めながら胸を高鳴らせていた。今こそよほよぼの老体だが、昔は初代宇宙探険・調査隊隊長をしていたし、今でも人類の宇宙研究の上にあたる役職、世界航空宇宙研究・調査連合事務総長に身を置いている。時をさかのぼれば西暦2050年、人類は全面核戦争を起こし地球を捨てた。あれから數千年は経たが、私は今までこの宇宙に浮かぶ鉄の塊の中で生きてきたのだ。  
確かにここは快適で何一つ不自由のない生活だ。だが、地面を踏みしめて宇宙研究をしたい、それが私の子どもの時からの夢だった。  
こんな事を考えているところ、おじいちゃん、何か面白い話をして。  
見慣れたちびっ子達が私に話しかけてきた。出発までまだ時間もあるし、今日はある男の話をしてやろう。

と言つて私は話し始めた。窓の外に目をやりながら……

「男達は初めての宇宙探険、調査隊として、荒れ果てた地球にかかる惑星や宇宙深部の調査をしていた。旅立つてからしばらくしてからのことだ、

「隊長、もうすぐ前方にすばるープレアデス

星団）が見えてくる頃です。」男は、どれどれ、おまきれいだ、なんて素晴らしい

しい景色なんだ。

とつぶやき、雪に向かってこう言つた。

「宇宙探険は人類誕生以来の夢だ。こんな

な景色が見れるのは宇宙への消えない情熱のおかげなんだよ。人間はいつまでこうやつて

感動していられるんだろうな。

隊は、その後も数々の美しい星々や新しい事を発見し、皆は元気分になり浮かれきつ

ていった。

しがし、しばらくして隊員の一人が

「あれは何でしょか。」  
と指を差しながら言った。近くに寄ってみると、地球と同じような環境の星だった。  
「もしやすると、生物がいるかもな。」  
男はそう言うと、カメラ付探査用ローバーを降ろすよう指示した。しかし、モニターに罕物の痕跡はあつたが、たが、大気は汚染され、瓦礫の山だけが残っている。明らかに争った形跡があつたのだ。地球近く似た星だつた。男はこの星にアストレイユと名付けた。  
かあ、たのだ。地球近く似た星だつた。男の頃から男は、我々がしていいる事は本当に正しいのか。ただただ宇宙を破壊するだけの行為ではなのが、と思いつめるようになれる。男の心の中には高嶺がある。一度原点に戻る。

石の様な星、地球を蘇らさなければいけないのではないかと、う気持ちとは逆に、宇宙は広いのだが、うんざり小さい星にこだわらぬで、はななかと聞いた事のなかで、祖父の話でしか聞いた事のなかで、はななかと、う気持ちもあつた。

のだ。しかし、この後このじんよりとし大空

気の中で一人の隊員が呆れた顔をして言い放つた言葉が、男を決意させたのである。

馬鹿だよなあ、俺達も、この星の住人だ

た奴うも。目の前しか見えでないのがよ。争うだり争っておいて星はポイ捨てがよ。こんな未来を目指してた訳じやないだろ!! 一体何処で道を間違えたんだ。

男はは。とな。た絶対に私達の故郷である

地球を蘇らせてやると固く心に誓った。

からだ、男が一人種の宇宙研究のトープにな

りたい。と言ひ始めようにな、たのは。

その後三まで言へたところで、シャト

ルの着席を促すアナウンスが流れだ。私はち

びっ子達の方を向いて

「今日はもう時間がない。だがこれだけは忘

れてはいかんぞ、今ある物をあたりまえだと

思う人じやない、自分で勝手に行動だけはする

人じやない、それじやあね。

と別れを告げると、シャトルの椅子に腰掛け、

もう一度窓を眺めた。そしてこうつぶやいた  
のだ。

「おお、あれ、なんだ、なんて素晴らしい景色な  
んだ。やはり何度も美しいな。こんな景  
色が見れるのも宇宙への消えないう情熱のおか  
げだな、その上そこには降り立てて宇宙研究に  
も没頭できるなんて、子どもの頃の夢のものも  
のじやないか。」

『う言えば、アストレイユも今では見違え  
る程美しくなったらしい。ちなみに、アスト

レイユとはギリシャ語で「希望の星」と言う

意味だ。やはり、夢や希望はいつまでも持ち  
続けるものだな。』

私は満足げに眺めていた。暗い宇宙に一際輝  
いて浮かんでいる、青い宝石の姿を。

コクヨ ケ-10 20×20